

保育者論が学生の保育観にどのような変化をもたらしたか

What Kind of Change did Nurture Person Theory Bring to the Nurture Look of Students?

(2017年3月31日受理)

山 本 佳 子

Yoshiko Yamamoto

Key words : 保育観, 溺愛, 過保護, 標準, 放任, 無視

要 約

保育者を目指して学んでいる学生は、入学後保育を学んでいくうちに独自の保育観が徐々に形成されていく。保育観の形成・変化に影響を与えるものは自分自身の親から受け継いだ成育歴であるか、あるいは専門的な学修により獲得したものであろうか。また保育観形成に保育者論が影響するかどうか検証し、今後の保育士養成に役立てる為にこの調査に取り組んだ。方法としては、対象者を縦断的に調査しそれらの変化を探った。

は じ め に

保育士養成課程での指導を続ける中で、毎年学生の変化に着目してきた。大学入学当初では、保育・幼児教育は楽しく、しかもたやすいものと捉えている学生が多い。しかし専門的な学びが始まると、保育所保育指針等の存在や保育課程・指導計画等々、子ども達との日常の遊びでは見られなかったものが無限に存在していたことに初めて気づき、唖然とする学生が多い。学生がなぜ保育士や幼稚園教諭・保育教諭への進路を選んだかという問いに対する回答は、入学時の大学入学志望動機に如実に記載されている。それらを大別すると次の三種類となる。一つは自分が幼少期に忘れられない保育士や幼稚園教諭にめぐりあい、その人への憧れと良い思い出が忘れられないと言う内容であり、もう一つは中学・高校時代の体験学習でこれなら自分にもできるだろうという感触を掴んだと言うこと、最後の一つは単に子どもが好きと言う理由である。往々にして学生全体が淡い安易な動機に裏付けられたこととは別に、実際に保育・幼児教育を専門的に深く学ぶにつれ、その奥深さと困難さに直面して戸

惑うことがある。しかしそれを乗り越えると別の側面として保育の楽しさや、やりがいの大きさを体験していく。このようにして個々人の保育観が出来上がってくるのである。

そこで今回は専門的知識がない入学当初の学生が自分の育ちを振り返っての思う成育歴と大学で専門的な学びを終えた後ではどのような保育観の変化が見られるのかに着目してみた。ただし今回は個々の学生の幼少期の家庭の育児傾向と保育者論等の学びのあとの保育観との関連性のみに焦点を当てた。

1. 問 題 の 所 在

我が国の保育・幼児教育では国策として幼保一体化による新システムが2011年(平成23)に打ち出されたが、その実現は地方で格差はあるものの緩やかに進みつつある状況であると言える。OECD等でも取り上げられているように世界的な傾向として就学前教育を重要視しそれをすべての幼児に対して平等に享受させていくという方向性は決して誤ったものではない。しかし我が国の経済

的社会的背景から保育所保育のニーズが増々高く、それに対応できない部分の打開策としての方策の一端としての幼保一体化とも解釈できないことは無い。これと同時に保育士不足の問題も益々クローズアップされてきた。勤務の内容に見合わない低賃金であることが周知されているが、それに反して保育士や幼稚園教諭を目指す学生数は決して減少しているとは言えない。保育士・幼稚園教諭への道を志向した学生が入学後どのような保育観を持った学生に変容し、そして保育・教育職にふさわしい人材となったかを検証する必要がある。そこで入学時の漠然とした感覚と3年間の専門的な学びの後の保育観を縦断的に調査した。ここで学生自身の成育歴はある程度保育観形成時に継承されるものと考えとともに、理想的な保育観は専門教育によって獲得できるという仮説を立てて調査を開始した。

2. 保 育 と は

この調査研究に当たる前に保育とは何かについて述べる必要がある。保育とは文字通り保護して育てることである。子どもが小さければ小さいほど保護が必要である為保育所保育指針ではこれを「養護」と呼び、それに加えて教育も必要とし、保育とは「養護と教育」とであると謳っている。また幼稚園においては、幼稚園は幼児を育てる施設ではなく学校であるので「保育」と言う言葉の中身には教育の割合が多いとされている。従って保護や養護と言う言葉が幼稚園教育要領には出てこないが、決して養護の部分がないわけではない、従来の幼稚園教育は3歳以上であったためにことさら幼稚園教育要領に明記していないわけである。子育てについてまとめて述べると家庭で行われるのは「子育て」であり、保育所で行われているのは「保育」と言うような使い分けもされている。従来の日本社会では小学校入学前までは主に育児が家庭で行われていたが、現代は保育所・幼稚園・認定こども園等の集団保育の割合が家庭保育よりも日々増加し、就学前の子どもが家庭で過ごす時間が減少傾向にあると言える。

3. 育児環境とその後の社会的影響

一般的に育児環境がその後の生き方に大きく影響するということは周知のとおりである。実際に私が保育現場にいた39年間でまさに実感したことでもある。また久保田(2008)によると虐待の多くが世代間連鎖であると言っても過言ではなく、これもまた同様に実際の保育現場で「私もたたかれて育ったからつい手が出る」と言った保護者に何回も出会った。これが断ち切らねばならない世代間連鎖である。そして山下(2010)らによると両親の育児態度がその後の生き方志向に関連しているという結果がある。この中には望ましい世代間連鎖もありまた反面改めるべきものもあると言える。しかしながら反面教師としての育児環境がその後の生き方に反対の望ましい作用をすることがある。これらを踏まえた上で、ここでは学生自身が自分の幼少期の親の養育態度を振り返って自己分析したものを集計することとした。

4. 保育の専門性

では、「子育て」と「保育」とはどこがどのように、違うのであろうか。ヒトは未成熟のまま誕生する。普通の家庭で育てられれば自然に身も心も育まれ成長するであろうが、集団での保育の時間が長くなればなるほど、保育者の専門性が必然的に問われるようになる。つまり家庭では1対1での子育てであるので、その子どもの欲求を十分に受け止めそれに答えられるであろう。しかし保育所の場合は、同年齢あるいは異年齢の子どもの保育にあたる保育士数は児童福祉法の最低基準で定められている。例えば0歳児が子ども3人に対して保育士1人、1～2歳児が子ども6人に対して保育士1人(以下省略)といった規定である。個と集団の違いの中でいかに家庭保育に比べて損色なく健康で情緒を安定させ自己発揮させながら発育発達させていくか、その為には保育者の専門性と技量が大いに問われると言える。そしてその専門性の中でも保育者の保育観が最も重要であると私は考える。

5. 保育観とは

「保育所保育指針」・「幼稚園教育要領」・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」という我が国の保育・幼児教育の基本になるものの中に保育観という語句は載っていない。しかし保育士養成課程ではいかに学生に望ましい保育観を身に付けさせるかと言うことが重点事項であると言える。保育観とは「保育に対する観念・信念」でありつまり「保育に対して保育者自身が持っている考え」や「正しいと思っていること」を指すと言える。詳しく言うとそのとき目の前の子どもにとって最善だと思えることを常に考え続け、選び続けて支援していくこと、また子どもからの自主的な動きを見逃さず大切にすること、子どもが楽しんでいることを喜び、一緒になって楽しむことなどと言える。そしてこれらは保育者それぞれが個々にその人なりの感覚や考え方をもち、微妙に十人十色の違いを醸し出していると言える。しかしその差はある意味では、保育が画一的にならず、一つの子どもの行動を見ても、様々な見方や解釈から、その後の指導方法がいろいろな方向へ発展する可能性を裏打ちしているとも言える。

6. 研究方法

T大学子ども学部保育士・幼稚園養成コースの学生に対して質問紙を使って4年間継続して調査した。最初に学生自身の成育歴を次の5パターンに分けて選択させた。それは溺愛型・過保護型・標準型・放任型・無視型という5つである。これらのカテゴリーについて比較検討した。また現在自分で考えて子育てには何が大切かを回答させた。次に保育者論を受講した後にどのような保育観を持つようになったかを記述により回答させた。これらをグラウンデッド・セオリーにより集計した。その後各学年の集計結果からランダムに20例ずつ選択し、表1～4に集計し考察をした。

7. 育児傾向を振り返る

入学当初、保育士・幼稚園教諭養成コースを選択している学生に専門科目履修前に質問紙で、前述の自分自身

の成育歴を5パターンに分けるとするとどれに当たるかを問い、なぜそう思うかなどを記述させた。その調査結果が図1～図4である。

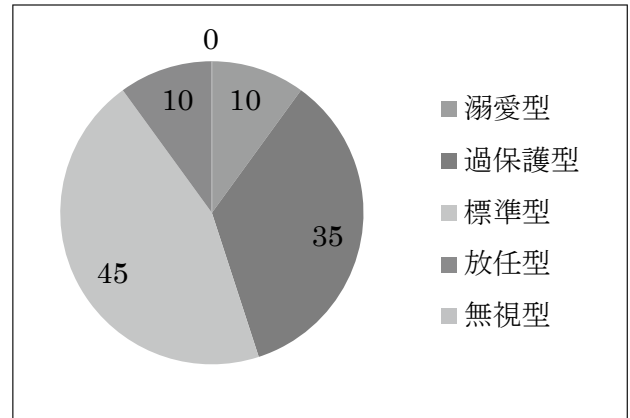


図1 23年度成育歴分類

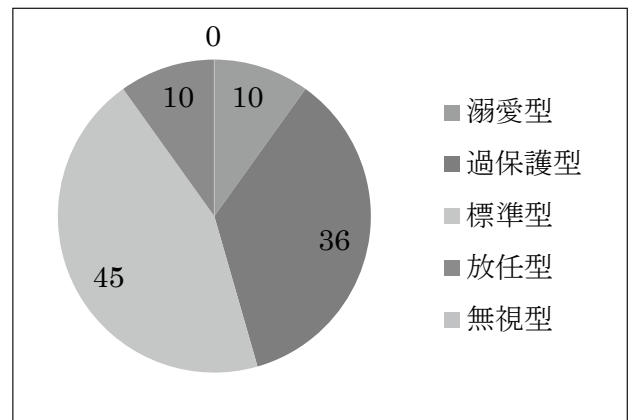


図2 24年度成育歴分類

23年度と24年度はほとんど差異が見られない。

溺愛型の理由の記述には「帰宅すると親が満面の笑顔で抱き着いてきた」「超過保護でしたが、善悪については厳しくしつけられた」などの記憶から自分は溺愛されていたと判断している。

また、過保護については、出かけるとき「どこへ行くのといつも言われた」「祖父母にかわいがられ洗濯物などたたんだことがない」等の記述があった。

放任型としては「祖母にずっと預けられたので子どもの時はさびしかった」「兄弟の真ん中でかまってもらえなかった」などの記述があった。

ここで着目するのは無視型である。これは、子どもに

とって最も厳しい状況と言える。それは「自分には発言権がないから意見なんか聞いてもらったことが無い」と言う記述であった。

標準型の特色については、数量の多い25年26年の例で述べる。

25年26年の結果は図3図4のとおりで類似していると言える。

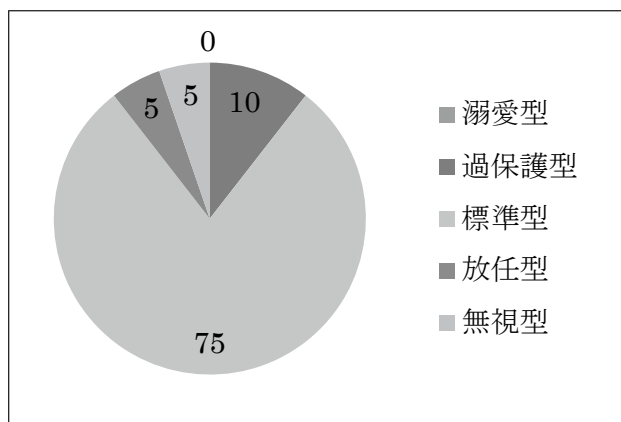


図3 25年度成育歴分類

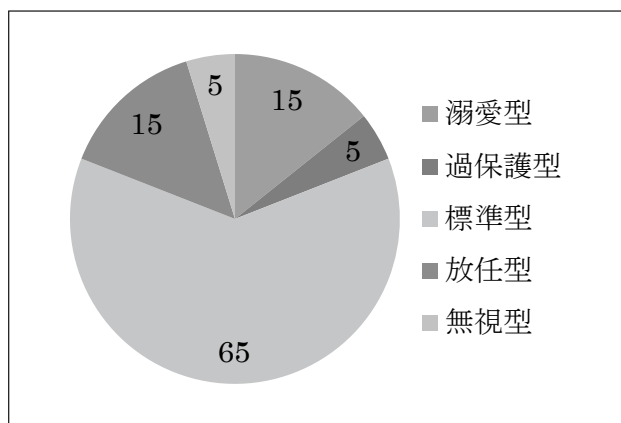


図4 26年度成育歴分類

一番多い答えは、自分は標準的に育てられたと回答している学生である。そしてその理由はこの質問に対しての自由記述は「優しい時には優しく、悪いことをしたら怒ってくれた」「制限もなく自分の考えで育てられたと思う」などがあつた。さらに幼少期に覚えていることと言う設問に対しての記述は極めて少なく、漠然としたものがわずかに書かれていた。例えば「よく外出した」「アルバムに写真がたくさん残っている」などでそれらが幼

少期の記憶の一つを形作る手掛かりになっていると言える。またほとんど覚えていないと言う学生もあった。以上成育歴の4年間を比較し図5として挙げた。

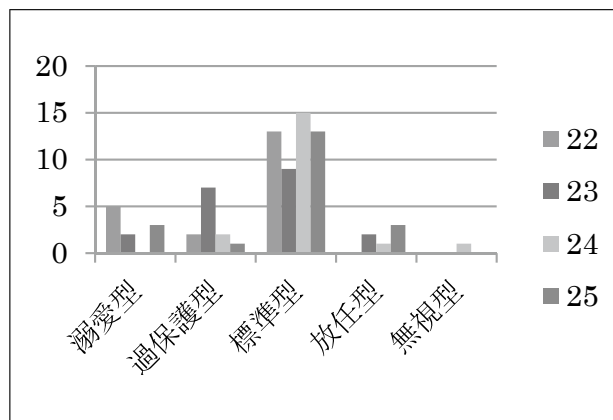


図5 5分類の比較

保育士・幼稚園教諭・小学校教諭を目指していることからそれぞれの学生の育児環境は標準的なものが多いだろうと類推していた。その結果は予想どおりであり、どの年代においても標準型と解答した学生が大半を占めている。また図5のとおり溺愛型・過保護型・標準型が全体の大半を占め、これから乳幼児を育成するための愛情の土壌は個々の学生にすでに培われているのではないかと見て取れる。しかし放任型や無視型については、学生自身がその様な判断しているが、保育や幼児教育の道に進もうと考えたと言うことは、それらの経験をプラス思考に変えて今後に生かそうとして進学してきたのではないかと、この時点で考えられる。

8. 縦断的集計による保育観は

やがて学生は自分の保育観を形成していく過程として「保育原理」「保育内容総論」などの理論と「保育方法演習Ⅰ・Ⅱ」「保育所実習研究」「保育実習」などで実践力を身に付けながら保育観を具体化していく。そして3学年で保育の学びの集大成として「保育者論」を学んだ後で、「自分が保育者になった時どのような保育をしていくか」と言う設問により保育観の調査ができた。学生の記述の中からラベルを抽出しグラウンデッド・セオリーにより集計し以下のように分類した。保育者論の履修当

初のラベルとしては、自主・自立・寛容・自由・愛情・個性・信頼・健康・スキンシップ・けじめ・幼児理解・情緒安定などが抽出された。一方保育者論履修後のラベルとしては、保護者支援・共生・直接体験・模範・承認・受容・思いやり・地域支援・協調などが抽出できた。以下これらのラベルにより集計した結果が表1である。

表1 23年度生の縦断的調査結果

番号	成育歴	履修前	履修後	考察	結果分類
13	溺愛型	愛情	保護者支援	別途記載	変Ⅰ
22	溺愛型	信頼	受容	同上	変Ⅰ
1	過保護型	自主	保護者支援	同上	変Ⅰ
3	過保護型	情緒安定	最善の利益	同上	変Ⅰ
8	過保護型	愛情	幼児理解	同上	変Ⅰ
10	過保護型	愛情	愛情	同上	現Ⅰ
11	過保護型	自主	最善の利益	同上	変Ⅱ
14	過保護型	幼児理解	信頼	同上	変Ⅱ
18	過保護型	元気	信頼	同上	変Ⅱ
2	標準型	自由	幼児理解	同上	変Ⅰ
4	標準型	標準	幼児理解	同上	変Ⅰ
5	標準型	愛情	幼児理解	同上	変Ⅰ
10	標準型	愛情	幼児理解	同上	変Ⅰ
15	標準型	个性的	幼児理解	同上	変Ⅱ
17	標準型	情緒安定	幼児理解	同上	変Ⅱ
19	標準型	幼児理解	信頼関係	同上	変Ⅱ
20	標準型	幼児理解	幼児理解	同上	現
21	標準型	スキンシップ	スキンシップ	同上	現
12	放任型	自立	自立	同上	現
16	放任型	自由	自立	同上	現

学生の育児傾向と学びの後の保育観との関連を縦断的に探るために表1～4を作成した。

結果の分類では、変容Ⅰ・変容Ⅱ・現状の3種類とした。変容Ⅰは成育歴にあまり関係なくあるいは、反面教師として考えた上で現代の子育て事情や保育者としての重要事項を学んだ結果、保育者になったうえで最も力点を置きたい事項を回答したことを意味する。変容Ⅱは自分の生育歴に従ってはいるが、保育者論を学んだ後でより深く保育者として具体的手法を取るべきかを回答した場合を指す。現状とは学生の育ちそのもので保育者論を

学んだ後でも保育観に変化はないことを表している。紙面の都合上表2～4の掲載はここでは省略する。

9. 考 察

次に23・24・25・26年の分析結果を変容Ⅰと変容Ⅱ・現状として比較した結果を図5として挙げる。これによると保育者論を学んだ後は一応の変容が見られることが分かる。変容Ⅰの数値が多いのは、専門的なことを学んで新しい知識を吸収したと解釈できる。次に変容Ⅱが多いのは学んだ後で、ではどのような方法を取ればよいかなど、今までの自分の保育観の上に具体的方法を加えていくようにしようとしたと解釈できる。また特徴としては、24年度の結果が他の年度に比べると特異である。つまり自分の考えを明らかに変えるか、全く変えないかの2パターンであると見て取れる。

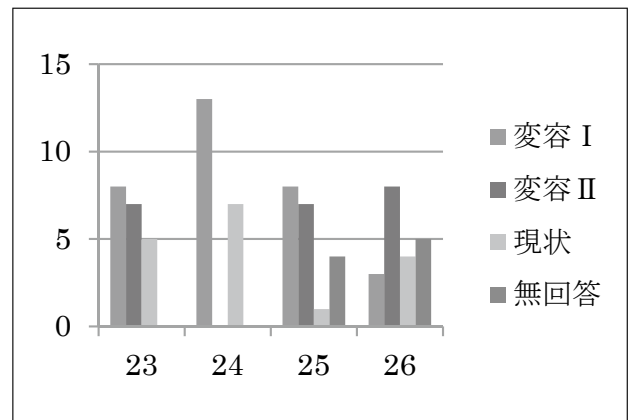


図6 変容の比較

次に変容の内容について具体的に述べる。

表1にある整理番号13は成育歴としては溺愛型だと回答している。その理由は前述した例で帰宅すると抱き着かれたというほど愛された実感を持っている。従って保育には愛情が最も大切であると感じていた。しかし保育者論他保育に関する専門的な学びにより、我が国の子育ての現状を知り、保護者支援が大切であることを学んだという結果である。

次に整理番号1の過保護型の場合は、自分が過保護にされた点で、もっと自主性を重んじて欲しかったという自己分析から、保育の場では自主性を重んじるべきだと

考えていた。その後保育者論をはじめとして専門的な保育の学びを終えた後には、保護者支援が大切であると言うことに気付いている。

標準型の解説を述べると、学びの前では、愛情・幼児理解・自由・個性・スキンシップなどが挙げられていたが、学びのあとでは幼児理解が圧倒的に多く、子ども一人一人に寄り添って目の前の子どもの気持ちを理解しようと言う感覚が伸びている様である。

次に放任型であるといった場合は学びの前後ともに自主・自立という回答目立つ。放任されたから自立して育ったと学生自身が認識しているのではないかと考えられる。しかし、自由記述の中には保育者論だけでなく保育実習で体験した保育士の態度が印象的で、日常的な家庭支援を自然に行って保護者と信頼関係を結び、その後子育て相談にのって指導している様子が書かれており、自主自立だけでなく家庭支援のできる保育者になりたいとあり、キーワードの集計で傾向を探るだけでは表せない意義深い回答も得られた。

10. 結 論

保育士・幼稚園教諭・保育教諭を目指して保育の専門的な学びをする中で、総合的に保育者としての基礎的な感覚である保育観が培われていく。学びの前の保育観の前程になるものは、学生自身の成育歴であろうと推論し、結果そのような場合が多かった。しかし反対に溺愛型だからもっと自由にさせてもらいたかった、あるいは過保護だからもっと自主的に行動すべきだなどと、反対の子育て方法を理想として描く学生も多い。その後保育の専門教育を受けることによって、保育は保育者と子どもだけではなく、子どもを中心にそれを取り巻く社会的要素があることや、保護者以外の人の影響力なども重要であることに気付き、少しずつ保育の理解が深まり、考え方が広がっていく様子が見られる。前段の保育者論がどのように学生の保育観に影響を及ぼすかというテーマは学びの後での専門用語が増えていることで検証できた。つまり専門用語を学生が理解して使うということである。

学びを終えた学生はやがて保育現場に旅立ち、次には保育のプロとしていろいろな課題に取り組むと同時に、同僚や先輩からの影響を受け、学生時代に培った保育観

がまた変化していくであろう。保育観は全員微妙に違っているが、すべての保育者は子どもの最善の利益を目指していることは確かである。また、今回の分析結果からテーマとは別の観点が浮かび上がったことをここに付け加えておく。それは年度によって愛情をたっぷり注がれた成育歴を持つ学年とそうではない学年があり、それらが学びの心情や意欲に影響が出ているのではないかと解釈される部分が筆者には感じられた。今後、このような傾向が見られたときには、個別対応の機会を多く持ち個々の学生のこれからをより一層力強く支えていく必要があると考えられた。いずれにしても子ども一人一人を見つめ、理解し、望ましい援助が出来る保育者を保育士養成課程で育成する使命は大きいと考えられる。

引用・参考文献

1. 厚生労働省 「保育所保育指針」
2. 厚生労働省「保育所保育指針解説」
3. 厚生労働省 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」
4. 林邦雄・谷田貝公昭監修 『保育実習』(株)一藝社 2012, 8, 10
5. 開仁志『保育現場と養成校のコラボレーション！実習生指導サポートブック』2013, 9, 10 (株)北大路書房
6. 近藤幹夫『保育とは何か』2014, 10, 23 (株)岩波書店
7. 小川博久『保育者養成論』2013, 4, 30 萌文書林
8. 山下実子・桂田恵美子「大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の育児態度との関連」2010, 3vol136臨床教育心理学研究
9. 久保田まり「児童虐待における世代間連鎖の問題と援助的介入の方略：発達臨床心理学的視点から」季刊・社会保障研究vol. 45No. 4
10. 梶田正己他『保育観の形成過程に関する事例研究』1990, vol137. bulletinofthefacultyofeducation Nagaoya university
11. 中俊博1996no. 6和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要
12. 湯地宏樹「保育学生の子どもの観・保育観と幼稚園教

育実習との関係」2012, 9, 2仁尾本 P F 学会研究委員会
会

13. 小川博久『保育者養成論』2013, 4. 30 (株) 萌文書林

巻末資料 表 2 ～ 3

番号	成育歴	履修前	履修後	考察	結果
10	過保護	最善の利益	自主	別紙	変 I
11	過保護	自主	自主	同上	現
1	標準型	直接体験	情緒安定	同上	変 I
3	標準型	自主	善悪判断	同上	変 I
4	標準型	最善の利益	善悪判断	同上	変 I
5	標準型	善悪判断	善悪判断	同上	現
6	標準型	直接体験	自主	同上	変 I
7	標準型	自主	最善の利益	同上	変 I
8	標準型	最善の利益	信頼関係	同上	変 I
12	標準型	自主	関わり	同上	変 I
13	標準型	愛情	愛情	同上	現
14	標準型	最善の利益	自主	同上	変 I
16	標準型	幼児理解	幼児理解	同上	現
17	標準型	最善の利益	信頼関係	同上	変 I
21	標準型	愛情	愛情	同上	現
22	標準型	愛情	最善の利益	同上	変 I
19	放任型	幼児理解	幼児理解	同上	現
15	無視型	幼児理解	幼児理解	同上	現
18	無記入	幼児理解	信頼関係	同上	変 I
20	無記入	生活習慣	幼児理解	同上	変 I

番号	成育歴	履修前	履修後	考察	結果分類
6	溺愛型	幼児理解	関わり	別紙	変 I
11	溺愛型	無記入	幼児理解	同上	
15	溺愛型	信頼	自由	同上	変 I
7	過保護型	幼児理解	共生	同上	変 II
2	標準型	信頼	最善の利益	同上	変 I
3	標準型	幼児理解	笑顔	同上	変 I
8	標準型	幼児理解	情緒安定	同上	変 I
12	標準型	最善の利益	信頼関係	同上	変 I
17	標準型	信頼関係	個性	同上	変 II
18	標準型	自由	幼児理解	同上	変 I
20	標準型	信頼関係	幼児理解	同上	変 I

以下省略

